

【佳作】

「北方領土問題について」

根室市立歯舞小中学校
2年 樫見 晃成

皆さんは北方領土と聞いて、何を思い描きますか？

僕は北方領土に一番近い歯舞小中学校に在学していますが、あまりこの問題に対する当事者意識がなかったのが事実です。母の実家が納沙布という事もあり、北方領土を何度も目にする機会があったにも関わらず、何故こんなに遠い問題なのか改めて考えてみました。

まず、真っ先に思ったのは、北方領土問題を伝える人、伝えられる人の意識、思いの違いです。僕も「北方領土の日」は、知っていましたが、どうしてその日なのか、どうして北方領土を返してほしいのか、具体的に教えてくれる人が周りにいないと理解しえないものでした。

そんな時、僕の曾祖母が元島民で、僕自身が島民四世だという事を知りました。そこから、僕自身もこの北方領土問題という大きな問題の当事者だと考え、向き合っていこうと思うようになりました。

そんな中、二〇一八年五月、日露首脳会談が行われ、領土問題にも何か進展があるかと期待していましたが、大きな進展はなく、共同経済活動の具体化にとどまりました。僕は何の意味があった会談なのか、正直分かりませんでした。

一方で、僕の学校ではビザなし交流の一環として、ロシアの方々との交流を行っています。今年も七月にありました。言葉は通じないながらも身振り手振りで交流し、ゲームやよさこいなどでお互いの意志を伝え合いました。後日、新聞で、訪問した一人が「今回出会った同世代との友好関係は途絶える事はないと確信している」と言ってくれた事を知り、とても嬉しく思いました。

僕の故郷が根室であるように、ロシアの方々も、今は北方領土が故郷なのです。僕は、それぞれ故郷を大事に思う気持ちはわかります。だからこそ今、北方領土に住んでいる人を追い出しても良いのか、北方領土を取り戻す事だけが解決なのか。国と国との問題ですが、それ以前に元島民と現島民の方々の、双方が納得できる解決方法はないのか。それが僕たち若い世代の領土問題解決への糸口だと思っています。

でも、心に何か引っかかるのも事実です。それはやはり、元島民の方々の思いです。僕の曾祖母は、十代で志発島から命からがら羅臼へ逃げ、それ以降七十年、故郷へ行く事はありませんでした。

「志発に一度でいいから帰りたいけど、出来ないな」母から聞いた曾祖母の言葉です。この言葉を残し昨年、曾祖母は天国へと旅立ちました。故郷へ帰れない…そんな無念を残して。その思いを受け継いでいくのは、今の自分達です。自分達のような若い世代の考え、元島民の思い、現島民の思いが一致した時、それこそが、何かが変わる、変えられる時ではないかと信じています。